

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第8号）

「春のユネスコ執行委員会」

2025年5月3日

ユネスコ日本大使の加納です。早いもので2025年もはや3分の1が経ちました。

パリは3月最終日曜日の30日からサマータイムが始まり、随分と日が長くなり、過ごしやすくなりました。4月13日にはパリ・マラソンが市内で開かれ、多くのランナーに市民が歓声を送っていました。



パリ・マラソン

（米国新政権によるユネスコに関する90日間レビュー）

1月20日に発足したトランプ米政権が、安全保障や経済貿易の面で世界を

揺るがせしていますが、国際機関も無縁ではありません。既に世界保健機関（WHO）など、一部の国際機関について脱退を表明したほか、多くの国際機関については残留するか否か、一定期間レビューを行なった上で判断するとしています。ユネスコについては、2月3日に出された大統領令により、90日間のレビューを行うとしており、その結果は5月初旬にも出される予定です。

米国は過去2回、ユネスコを脱退しています。一度目は1984年、当時のムボウ事務局長（セネガル出身）の時のユネスコのガバナンスに不満を持ったレーガン政権下で脱退しました。復帰したのは、松浦事務局長時代の2003年です。二度目は第一次トランプ政権時の2018年。2011年にパレスチナがユネスコに加盟したことで、パレスチナ加盟の国際機関への拠出を禁ずる米国内法により米国の拠出がストップし、結局、イスラエルと共に脱退に至りました。バイデン政権下での2023年に、米国内法の適用を免除した上で、二度目の復帰を果たし、2024年には議会承認を得た正式な大使が派遣されたものの、同年の大統領選挙でのトランプ候補の当選により、新政権発足を前に離任。現在は大使が任命されておらず、臨時代理大使以下の体制で対応している状況です。

（春のユネスコ執行委員会）

米国におけるレビューがなされている中で、4月2日から17日までユネスコ執行委員会が開催されました。本年秋のユネスコ総会に向けた準備として、次期予算計画年度（2026-2027年）の予算のシーリングを決めたり、次期事務局長候補とのインタビューを行う重要な機会ですが、ユネスコに対する米国の立場が不透明な状況が、委員会の議事進行全般に大きな影を落としていました。

予算関連では、米国のユネスコ残留が見通せないという状況の中、次年度の予算シーリングも決められないということで先送りされた他、今年度の予算執行についても事務局に一層の節制を求める決議が採択されました。

また、ユネスコの活動全般に関する議題の中で、米国は、SDG（持続可能な開発目標）やDEI（多様性・公平性・包括性）、ジェンダーの要素を含むものについては現政権の立場と相容れないとして、反対投票かコンセンサスから離脱する対応を繰り返しましたが、米国に同調する国はほとんどなく、孤立が際立

つ形となりました。

救いだったのは、地域情勢関連議題において、ウクライナでは従来通り、欧州や日本などと足並みを揃えた対応（賛成投票。中国やグローバル・サウスの一部の国は反対・棄権）をとったこと、中東関連では、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）を除き、ガザ、レバノン、シリア関連議題でいずれもコンセンサスに参加したことです。

今後、ユネスコ残留の是非についての米国の姿勢も明らかになってくるでしょうが、状況次第では、秋の執行委員会では予算関連の議論がより厳しいものになることが予想されます。

今回の執行委員会におけるナショナル・ステートメントでは、私から、戦後80周年、ユネスコ憲章採択80周年の節目の年であるにもかかわらず、ユネスコ憲章の「人々の心に平和の砦を築く」理念の実現に至る道のり険しいものがあるとした上で、このような状況においてこそ、日本はユネスコにおいて責任ある役割を果たしていく用意がある旨述べたところです。全文はこちらになります。

<https://www.unesco.emb-japan.go.jp/files/100827124.pdf>



筆者による日本のナショナル・ステートメント

（ユネスコ事務局長選挙）

ユネスコ執行委員会のもう一つの注目点は次の事務局長候補とのインタビュー

一です。

本年 11 月に任期満了を迎えるアズレー現事務局長の後任事務局長を選ぶプロセスについては、昨年秋の執行委員会で立候補の受付が開始され、今年 3 月 15 日で締め切られました。その結果、

エジプト出身のハーリド・エルアナーニー候補

メキシコ出身のガブリエラ・ラモス候補

コンゴ出身のフィルミン・マトコ候補

の 3 名が立候補を届け出ました。今回の執行委員会では、この 3 名の候補者と執行委員国との間でインタビューが行われました。

早くから立候補を表明し、精力的に活動を行ってきたのはエジプト出身のエルアナーニー候補です。エジプト考古学が専門で、観光ガイド・研究者から政界に進み、エジプト政府の遺跡・観光大臣を務めました。今年 7 月に正式オープンする「大エジプト博物館」の責任者として、同博物館の建設に多大な協力を行なった日本の各界との関係も深いものがあります。



ハーリド・エル・アナーニー候補

メキシコ出身のラモス候補は今回唯一の女性候補です。外交官出身で、ユネスコの前は OECD でメキシコ出身の事務総長の官房長を務めており、その後、ユネスコに移籍し、人文・社会科学局の事務局長補を務めています。同局では、人文・社会科学に関わる幅広いテーマを扱っていますが、特に近年では人

工知能（AI）の問題に取り組んでいます。2021年には、ユネスコの全加盟国の関与を得て、AIの利用に関する倫理規範を策定し、その実施における途上国でのキャパシティ・ビルディング支援を行ってきており、ラモス候補はその旗振り役でした。AIは、G7やOECDなど、様々なマルチのフォーラムで扱われていますが、グローバル・サウス諸国も巻き込んだ包括的な規範策定を行えるのがユネスコの強みであると、ラモス候補は指摘しています。



ガブリエラ・ラモス候補

コンゴ出身のマトコ候補は長年ユネスコで務めてきた「生え抜き」の候補で、本部とアフリカの現地事務所を含め、ユネスコの事情に精通しています。数年前に一旦ユネスコを退職したのですが、アズレー事務局長に請われて昨年復帰し、アフリカ・対外関係局の事務局長補を務めていました。

エル・アナーニー候補の届け出が、昨年10月の立候補受付開始直後だったのに比べ、ラモス候補とマトコ候補の立候補届け出は、締切の2日前の3月13日でした。その間、様々な噂が飛び交っていましたが、3月13日は執行委員会に先立つ準備会合の最中であり、各国からの事務局に対する質問に対してラモス候補、マトコ候補がそれぞれ事務局の立場からの説明を終えた直後に立候補の情報が駆け巡ったため、会議場内でもそれがもつぱらの話題となりました。4月に入り、両候補とも事務局の職務から離れ、事務局長候補としての活動に専念しています。



フィルミン・マトコ候補

執行委員会でのインタビューは、各候補ごとに約90分行われました。冒頭、候補者がステートメントを行なった後、6つの地域グループの代表が1問ずつ質問を行い、候補者が回答。残った時間の許す範囲で、個別の執行委員国が質問を行い、最後に候補者が締め括りの発言を行って終了という流れです。質問の順番は全てくじ引きで行われ、候補者への質問を希望する委員国は自国の名前を書いた札をボックスに入れ、その中から議長が札を無作為に一枚ずつピックアップし、札に書かれた委員国の代表を指名するというやり方です。私もエル・アナーニー氏のインタビューの時に質問を希望し、札がピックアップされたので、科学分野におけるユネスコの役割について質問を行いました。



事務局長候補者に質問を行う筆者

今回のインタビューで、各候補者が執行委員会の場で正式なお披露目を行なったこととなります。次は10月の秋の執行委員会で執行委員会が指名する候補者を選ぶ選挙が行われます。これが実質的な事務局長の決定となりますが、正式には11月のユネスコ総会で任命されることとなります。それまでの間、各候補者は様々な形でそれぞれ選挙活動を繰り広げていくことでしょう。

(岩屋外務大臣のユネスコ訪問)

日本の連休中の5月2日～3日には、岩屋毅外務大臣がフランスを訪問し、5月2日にユネスコ本部においてアズレー事務局長との会談が行われました。岩屋大臣がアズレー事務局長に会うのは今回が初めてです。



岩屋外務大臣とアズレー事務局長との会談

岩屋大臣からは、就任以来約８年間にわたるアズレー事務局長のリーダーシップに敬意を表しつつ、日本がこれまで教育、科学、文化などユネスコの活動全般を支援してきたこと、とりわけウクライナやガザ、レバノンなど紛争地域におけるユネスコによる教育支援、文化財保護やジャーナリストの安全確保の活動を高く評価し、支援してきている旨述べました。アズレー事務局長からは日本の長年にわたる支援に深い謝意が示されました。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大